

## 社会状況の変化に伴う大学生の行動変化についての検討 —新型コロナウイルス感染症及び感染予防対策の影響—

川島 範章

福山平成大学 福祉健康学部  
(こども学科)

E-mail : kawashima@heisei-u.ac.jp

### 【要旨】

2020年からの新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、社会の在り方が大きく変わった。大学教育については、感染対策の基本的な考え方とともに、遠隔授業等の活用など学修機会の確保が示された。社会状況の変化に伴う日常生活や学校生活の変化への学生の対応や適応に個人差がある。本研究においては、新型コロナウイルス感染症感染拡大とそれに対応する社会生活の変化により、大学生が受けた影響について、自己効力感との関係から検討するため、大学生を対象に質問紙調査を実施した。調査項目は、主観的行動変化認知質問項目、学修スキル向上志向性質問項目を選定して、一般性セルフ・エフェカシー尺度 (GSES) とともに実施した。

主観的行動変化認知質問項目については、因子分析により、「学習方略因子」、「抑うつ傾向因子」、「健康不安因子」の3因子が解釈された。これらは遠隔授業などへの対応、コミュニケーションや交友関係の変化、健康の自己管理意識の変化などを反映する因子構成であると考えられた。学修スキル向上志向性質問項目については、1因子構造が推定された。GSESとの関連では、「抑うつ傾向因子」においては、GSES得点高位グループが、中位グループと低位グループに比べて得点が低い結果であった。自己効力感が高い方が、一連の社会状況の変化に対する適応がよく、抑うつの傾向が低く抑えられるためと考えられた。また、「健康不安因子」においても、GSES得点高位グループが、中位グループと低位グループに比べて得点が有意に低いという結果であった。自己効力感が高い方が、一連の社会状況の変化に対する適応がよく、健康行動においても自己コントロールができる傾向にあるためと考えられた。これらのことにより、自己効力感の強さの違いが、学生の社会状況への変化への適応や新しい生活様式への移行に影響を及ぼすことが確認された。

KEY WORDS : 自己効力感, 行動変化, 新型コロナウイルス感染症

## 1. はじめに

2020年からの新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大により、社会の在り方が大きく変わった。緊急事態宣言が、1回目となる2020年4月7日～5月25日、2回目となる2021年1月8日～3月21日、3回目となる2021年4月25日～本稿執筆時点の9月（継続中）、と3回の期間において発出され、まん延防止等重点措置の指定と合わせると、発出・指定の期間、対象となった地域ともに長期、広範囲となっている。

感染拡大防止に向けた取組としては、2020年5月4日に、政府の専門家会議の提言を受けて「新しい生活様式」の実践例が公表された（厚生労働省、2020）。これは、①身体的距離の確保、②マスクの着用、③手洗いを感染防止の3つの基本とするものであり、日常生活における3密（密集、密接、密閉）の回避や働き方のスタイルにおけるテレワークやローテーション勤務なども例示された。

教育に関しては、2020年5月22日に「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～「学校の新しい生活様式」～」が通知され、その後、2021年4月28日付けのVer.6まで改訂されている（文部科学省、2021a）。また、感染防止を徹底した上で、家庭学習支援、分散登校、ICT活用など「学びの保障」のための取組例が示された（文部科学省、2020a）。

大学教育については、2020年6月5日に「大学等における新型コロナウイルス感染症への対応ガイドライン」（文部科学省、2020b）が公表され、感染対策の基本的な考え方とともに、遠隔授業等の活用や実技・実習の取扱いなど学修機会の確保が示された。「大学等における後期等の授業の実施状況に関する調査」（文部科学省、2020c）によると、2020年10月20日時点での大学等の授業の実施状況については、調査対象校のうち約半数（190校／50.4％）では授業全体の半分以上を対面授業で実施、残りの大学（187校／49.6％）では対面授業の実施割合が半分未満となっている。遠隔授業の学生の受けとめについては、「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査」（文部科学省、2021b）では、2020年度後期に履修した授業のうち、「オンライン授業がほとんど・すべてだった」と回答した学生が59.6％であり、オンライン授業の満足度は、「満足」と「ある程度満足」を合わせると56.9％であった。オンライン授業の良かった点については、「自分で

選んだ場所で授業を受けられた」「自分のペースで学修できた」などが挙げられる一方、悪かった点については「レポート等の課題が多かった」「質問等、相互のやりとりの機会がない・少ない」などが多く挙げられている。このような調査からは、新型コロナウイルス感染症の流行という社会状況の変化に伴う日常生活や学校生活の変化への学生の対応や適応に個人差があるということが分かる。

バンデューラ（1997）は、社会の現実の困難さの中で、人間が目標を達成したり肯定的ウェルビーイング状態であるためには、「楽観的な自己効力」「強い自己効力感」が必要であると述べている。

自己効力感（Self-Efficacy）とは、バンデューラが提唱した概念であり、自分がある状況において必要な行動をうまく遂行できるという予測を持ち、自分の可能性を認知していることを指す概念である。バンデューラは、人が行動を決定する要因として、その行動の結果に対する予測（結果予期）とともに、その行動を遂行する自分の能力についての予測（効力予期）を挙げた（図1）。この効力予期の確信の程度が自己効力感という自己の認知である。

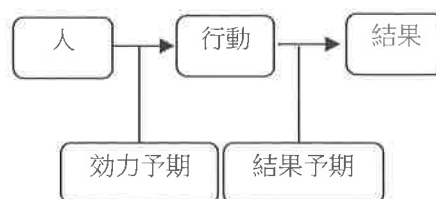


図1 効力予期と結果予期（Bandura, 1977より翻訳）

さらに、このような自己効力理論は、個人のレベルだけでなく集団のレベルも含む包括的な理論と考えられている（Bandura, 1977）。

川島（2021）は、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響を踏まえて、新たに健康統制感と健康行動の関係について検討した。健康統制感（Health Locus of Control）とは、健康行動において結果に対して自分がどれくらいコントロールできるかという感覚や信念である。この研究では、堀毛（1991）の日本版主観的健康統制感尺度（JHLC: Japanese Version of the Health Locus of Control Scales）を用いたが、このうち自分自身因子が、感染防止行動との間に相関が認められ、この因子の得点が高いと感染予防生活様式と感染予防行動を行う傾向が有意に高いことが確認された。この自分自身

因子は、その項目内容から、健康行動における自己効力感を捉えていると考えられた。

そこで、本研究においては、新型コロナウイルス感染症感染拡大とそれに対応する社会生活の変化により、大学生がどのような影響を受けているのかについて、自己効力感との関係から検討することとした。

## 2. 目的

本研究の目的は、自己効力感と、新型コロナウイルス感染症感染拡大とそれに伴う社会状況の変化による、大学生の学生生活に関する行動の変化と学修に関する志向性の関係を検討することである。

## 3. 方法

大学生の学生生活に関する行動と学修スキルについての志向性を調べるために、大学生を対象として予備調査を実施した。予備調査は、2021年7月にオンライン形式でアンケートを実施し、大学生71名から回答を得た。得られた回答については、複数の学生が言及していた内容について、要約して質問項目とするという方法を用いた。

行動の変化については、ポジティブな方向への変化とネガティブな方向への変化について回答があったことから、そのバランスを考え、最終的には、一般的にポジティブな変化と捉えられる12項目と一般的にネガティブな変化と捉えられる12項目を選定し、合計24項目からなる「主観的行動変化認知質問項目」とした。

学修スキルについての志向性については、遠隔授業などに対応するスキルに加えて、より一般的なスキルについての回答があったことから、遠隔授業への対応と考えられるスキルに限定せず、広く学修スキルと捉えられる12項目を選定し、「学修スキル向上志向性質問項目」とした。

自己効力感の測定にあたっては、坂野・東條(1986)で作成された一般性セルフ・エフェカシー尺度(GSES: General Self-Efficacy Scale)を用いた。この尺度は、「個人の行動に長期的に影響を及ぼす認知されたself-efficacyの強さを査定する」という目的で作成された、16項目からなる尺度である。この尺度には、少ない質問項目で一般的な自己効力感の程度を調べることができる特徴があることから、本研究における自己効力感を測定する尺度として用いることとした。

表1に、質問紙の項目数と回答方法を示す。

表1 質問紙の項目数と回答方法

質問紙	項目数	回答方法
主観的行動変化認知質問項目	24	5件法
学修スキル向上志向性質問項目	12	5件法
一般性セルフ・エフェカシー尺度	16	2件法

調査対象者は、広島県下の中核市にある私立大学の学生とし、調査時期は2021年8月とした。調査は、質問紙を用いた調査として実施した。なお、調査結果の統計処理については、IBM SPSS Statistics 27を用いた。

## 4. 結果

### 4.1 分析対象者の内訳

調査にあたっては、学部1年生から大学院1年生までの80人に調査への協力を依頼し、80人から回答を得た(回答率100%)。分析対象者の内訳は以下の通りである(表2)。

表2 分析対象者の内訳

	男性	女性	全体
学部 1年	9	25	34
3年	8	29	37
4年	2	5	7
大学院1年	2	0	2
全体	21	59	80

### 4.2 主観的行動変化認知質問項目

主観的行動変化認知質問項目の24項目については、因子分析により因子の推定を行った。因子数については、因子負荷量から2因子から4因子を想定した分析を試行した。その結果、本研究における分析には、最尤法、バリマックス回転により求めた3因子を用いることとした(表3)。F1に対する寄与が大きい項目は12項目であった。このうち、F1に対する寄与が0.4未満のq15、q13、q1とF2に対する寄与が0.35以上のq16については除外することとした。次に、F2に対する寄与が大きい項目は7項目であった。このうち、F2に対する寄与が0.4未満のq22と、F3に対する寄与が0.35以上のq5については除外することとした。次に、F3に対する寄与が大きい項目は5項目であった。このうち、F2に対する寄与が0.35以上のq4については除外することとした。

表3 24項目を対象にした因子分析

項目	F1	F2	F3
q14	0.77	0.076	-0.051
q21	0.763	0.102	0.129
q23	0.682	0.146	0.006
q2	-0.584	0.073	-0.01
q16	0.583	-0.388	-0.12
q7	-0.51	0.177	0.17
q20	0.506	-0.249	0.14
q19	0.452	-0.233	0.042
q24	0.417	-0.021	-0.19
q15	0.272	-0.2	-0.107
q13	0.251	0.137	0.005
q1	-0.195	0.107	0.022
q17	0.13	-0.636	0.078
q8	0.006	0.63	0.302
q9	-0.057	0.613	0.193
q18	0.294	-0.598	-0.201
q5	-0.072	0.518	0.484
q3	0.185	0.43	0.219
q22	0.224	-0.289	-0.21
q10	0.007	0.125	0.832
q6	0.053	0.129	0.809
q11	-0.111	0.087	0.518
q12	-0.136	0.316	0.436
q4	0.117	0.381	0.408

次に、前述の基準より7項目を除外して残った17項目について、再度、最尤法、バリマックス回転により因子分析を行った。この結果、17項目全てが基準を満たしたことから、この因子分析結果に基づき、第1因子として8項目、第2因子として4項目、第3因子として5項目を採用することとした(表4)。各因子で採用した項目の内容は、表5、表6、表7のとおりである。

表4 項目除去後の因子分析

項目	第1因子	第2因子	第3因子
q14	0.782	-0.073	0.042
q21	0.781	0.11	0.079
q23	0.706	-0.012	0.109
q2	-0.574	-0.016	0.078
q7	-0.492	0.175	0.207
q20	0.461	0.101	-0.224
q19	0.428	0.012	-0.23
q24	0.389	-0.198	0.004
q10	0.028	0.832	0.113
q6	0.091	0.829	0.124
q11	-0.105	0.499	0.117
q12	-0.117	0.436	0.315
q8	0.016	0.3	0.693
q9	-0.052	0.186	0.675
q17	0.111	0.067	-0.621
q18	0.269	-0.209	-0.548
q3	0.205	0.207	0.355

表5 第1因子の項目

q14	オンラインで授業や会議に参加する技術が身に付いた
q21	パソコンなどの情報機器の知識や操作する力が向上した
q23	オンライン学習で自分のペースで学習できるようになった
q2	勉強に対する集中力や意欲が低下した(逆転項目)
q7	計画的に学習を進められなくなった(逆転項目)
q20	物事を進めるときに、計画したり下調べすることが増えた
q19	料理や掃除など家事をする力がついた
q24	家族や周りの人を大切にしたいと考えるようになった

$\alpha = .801$

第1因子は、「オンラインで授業や会議に参加する技術が身に付いた」「パソコンなどの情報機器の知識や操作する力が向上した」「オンライン学習で自分のペースで学習できるようになった」「勉強に対する集中力や意

欲が低下した（逆転項目）」「計画的に学習を進められなくなった（逆転項目）」などの8つの項目から測定される因子であり、因子への寄与が高い項目の内容から「学習方略因子」と解釈した。 $\alpha$ 係数は.801であった。

表6 第2因子の項目

q10	友だちと一緒に過ごすことが楽しく感じられなくなった
q6	対面でおしゃべりすることが楽しく感じられなくなった
q11	したいことや手に入れたいものが明確でなくなった
q12	将来の職業選択について迷うようになった

$\alpha = .739$

第2因子は、「友だちと一緒に過ごすことが楽しく感じられなくなった」「対面でおしゃべりすることが楽しく感じられなくなった」「したいことや手に入れたいものが明確でなくなった」「将来の職業選択について迷うようになった」の4つの項目から測定される因子であり、因子への寄与が高い項目の内容から「抑うつ傾向因子」と解釈した。 $\alpha$ 係数は.739であった。

表7 第3因子の項目

q8	運動する意欲が低下した
q9	運動能力や体力について自信が低下した
q17	健康に気を配り体力トレーニングなどをするようになった（逆転項目）
q18	積極的に友人と関わろうと思うようになった（逆転項目）
q3	外出する意欲が低下した

$\alpha = .729$

第3因子は、「運動する意欲が低下した」「運動能力や体力について自信が低下した」「健康に気を配り体力トレーニングなどをするようになった」「積極的に友人と関わろうと思うようになった」「外出する意欲が低下した」の5つの項目から測定される因子であり、因子への寄与が高い項目の内容から「健康不安因子」と解釈した。 $\alpha$ 係数は.729であった。

次に、各因子の回答の得点化を行った。得点化については、各項目とも「よく当てはまる」を5点、「やや当てはまる」を4点、「どちらともいえない」を3点、「あまり当てはまらない」を2点、「全く当てはまらない

い」を1点として算出した（表8, 9, 10）。

表8 第1因子の得点

	全体	男性	女性
平均値	3.32	3.46	3.28
度数	80	21	59
標準偏差	0.75	0.85	0.71
最小値	1.38	1.88	1.38
最大値	4.75	4.63	4.75

表9 第2因子の得点

	全体	男性	女性
平均値	2.00	1.75	2.09
度数	80	21	59
標準偏差	0.81	0.68	0.84
最小値	1	1	1
最大値	4.25	3.75	4.25

表10 第3因子の得点

	全体	男性	女性
平均値	3.16	2.82	3.28
度数	80	21	59
標準偏差	0.93	0.84	0.94
最小値	1	1	1
最大値	5	4.2	5

#### 4.3 学修スキル向上志向性質問項目

学修スキル向上志向性質問項目の12項目については、因子分析（最尤法）から1因子に収束することが推定された（表11）。よって、12項目を「学修スキル向上志向性」（以下、表中においては志向性と表記する。）とした（表12）。 $\alpha$ 係数は.801であった。

表11 因子分析の結果

項目	因子
q31	0.786
q25	0.781
q26	0.768

q27	0.741	度数	80	21	59
q29	0.727	標準偏差	0.79	0.69	0.81
q34	0.722	最小値	1	2.67	1
q28	0.714	最大値	5	5	5
q32	0.676				
q30	0.674				
q35	0.659				
q33	0.626				
q36	0.623				

#### 4.4 性差の検討

主観的行動変化認知及び学修スキル向上志向性について、対応のないT検定により性差を検討した。その結果、主観的行動変化認知のいずれの因子においても有意差は認められなかった（表14）。

表12 学修スキル向上志向性質問項目

q 25	勉強に集中する力を向上させたいと思うようになった
q 26	文章を書く力を向上させたいと思うようになった
q 27	コミュニケーション能力を向上させたいと思うようになった
q 28	情報機器の操作やキーボード入力速度を向上させたい
q 29	自分の意見をはっきり伝えられるようになりたいと思うようになった
q 30	オンラインで学習や仕事を進める力を身に付けたいと思うようになった
q 31	行動力や企画力を向上させたいと思うようになった
q 32	人の感情を敏感に感じられるようになりたいと思うようになった
q 33	主体性や積極性を向上させたいと思うようになった
q 34	将来の職業に必要なスキルを高めたいと思うようになった

$\alpha = .801$

次に、12項目の得点化を行った。得点化については、各項目とも「よく当てはまる」を5点、「やや当てはまる」を4点、「どちらともいえない」を3点、「あまり当てはまらない」を2点、「全く当てはまらない」を1点として算出した（表13）。

表13 スキル志向性の得点

	全体	男性	女性
平均値	3.82	4.09	3.72

表14 性差のT検定

	t 値	自由度	有意確率 (両側)
第1因子	0.96	78	0.34
第2因子	-1.68	78	0.10
第3因子	-1.98	78	0.05
志向性	1.87	78	0.07

#### 4.5 一般性セルフ・エフェカシー尺度

自己効力感の測定には、一般性セルフ・エフェカシー尺度（GSES）を用いた（表15）。この尺度は、「個人の行動に長期的に影響を及ぼす認知されたself-efficacyの強さを査定する」という目的で作成された、16項目からなる尺度である。各項目への回答は2件法（Yes、またはNo）で行うものである。得点については、Yesを1点、Noを0点として総計を求めた（表16）。

表15 一般性セルフ・エフェカシー尺度の項目

se1	何か仕事をするとき、自信を持ってやるほうである
se2	過去におかした失敗やいやな経験を思い出して、暗い気持ちになることがよくある
se3	友人よりすぐれた能力がある
se4	仕事を終えた後、失敗したと感じることのほうが多い
se5	人と比べて心配性なほうである
se6	何かを決める時、迷わずに決定するほうである
se7	何かをする時、うまくいかないのではないかと不安になることが多い
se8	引っ込み思案なほうだと思う

	不安になることが多い
se8	引っ込み思案なほうだと思ふ
se9	人より記憶力がよいほうである
se10	結果の見通しがつかない仕事でも、積極的に取り組んで行くほうだと思ふ
se11	どうやったらよいか決心がつかずに仕事にとりかかれないことがよくある
se12	友人よりも特にすぐれた知識を持っている分野がある
se13	どんなことでも積極的にこなすほうである
se14	小さな失敗でも人よりずっと気にするほうである
se15	積極的に活動するのは、苦手なほうである
se16	世の中に貢献できる力があると思ふ

表16 一般性セルフ・エフェカシー尺度の得点

	全体	男性	女性
平均値	5.66	7.76	4.92
度数	80	21	59
標準偏差	3.42	3.14	3.22
最小値	0	3	0
最大値	13	13	12

#### 4.6 一般性セルフ・エフェカシー尺度と主観的行動変化認知及び学修スキル向上志向性の関係

GSESと主観的行動変化認知及び学修スキル向上志向性の関係については、ピアソンの相関係数と有意確率(両側検定)を求めた(表17)。

第1因子については、スキル志向性との間に正の相関(相関係数 $r=.494$ 、以下同様に数値は相関係数を表す)が認められた( $p<.01$ )。第2因子については、第3因子との間に正の相関( $r=.392$ )、GSESとの間に負の相関( $r=-.326$ )が認められた( $p<.01$ )。第3因子については、GSESとの間に負の相関( $r=-.436$ )が認められた( $p<.01$ )。

表17 相関分析

	第2因子	第3因子	スキル志向性	GSES
第1因子	-.108	-.127	.494**	.129
第2因子		.392**	-.123	-.326**

第3因子	-.117	-.436**
志向性		.09

\*\* 相関係数は 1% 水準で有意(両側)

次に、GSESの得点の高低により、回答者を3グループに分け、グループごとに、主観的行動変化認知及び学修スキル向上志向性の得点を比較した。グループ化にあたっては、GSESの得点の分布とグループに割り当てる人数を考慮して、表18の割り当てとした。

GSESの得点グループ別の主観的行動変化認知及び学修スキル向上志向性の得点は表19のとおりであった。

表18 GSESの得点グループの割り当て

	人数	最大	最小	平均値	標準偏差
高位	26	13	8	9.7	1.64
中位	26	7	4	5.5	1.27
低位	28	3	1	2.1	0.94
合計	80	13	1	5.7	3.42

表19 一般性セルフ・エフェカシー尺度得点グループ別の主観的行動変化認知及び学修スキル向上志向性の得点

	GSES得点	第1因子	第2因子	第3因子	志向性
高位	平均値	3.43	1.59	2.55	3.88
	度数	26	26	26	26
	標準偏差	0.72	0.63	0.74	0.89
中位	平均値	3.34	2.19	3.44	3.81
	度数	26	26	26	26
	標準偏差	0.87	0.80	1.03	0.89
低位	平均値	3.21	2.21	3.46	3.77
	度数	28	28	28	28
	標準偏差	0.66	0.85	0.71	0.59
合計	平均値	3.32	2.00	3.16	3.82
	度数	80	80	80	80
	標準偏差	0.75	0.81	0.93	0.79

表20 分散分析の結果

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
第1因子	グループ間	0.709	2	0.355	0.628	0.54
	グループ内	43.5	77	0.565		
	合計	44.21	79			
第2因子	グループ間	6.691	2	3.346	5.647	0.01
	グループ内	45.62	77	0.592		
	合計	52.31	79			
第3因子	グループ間	14.04	2	7.02	10.01	0.00
	グループ内	54.02	77	0.701		
	合計	68.06	79			
志向性	グループ間	0.148	2	0.074	0.116	0.89
	グループ内	49.3	77	0.64		
	合計	49.45	79			

GSESの得点グループ別の得点差については、高、中、低位のグループを要因とする一要因の分散分析を用いた。その結果、有意差が認められたのは、主観的行動変化認知の第2因子と第3因子であった（表20）。

第2因子は、高位グループの平均が1.59、中位グループの平均が2.19、低位グループの平均が2.21であり、分散分析の結果、グループ要因は5%水準で有意であった（ $F(2, 77) = 5.647, p < .05$ ）。多重比較の結果、高位グループと中位グループ、低位グループの間で有意差が認められた（ $p < .05$ ）。GSES高位グループがGSES中位グループやGSES低位グループに比べて第2因子の得点が有意に低いという結果であった（図2）。

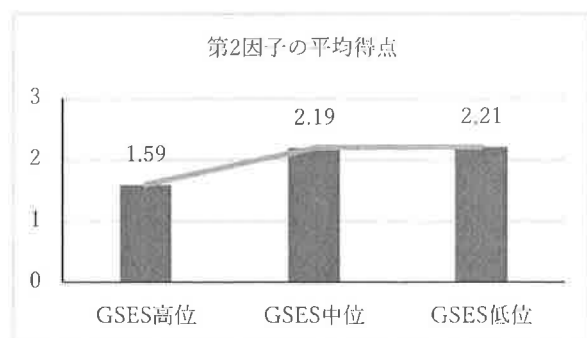


図2 第2因子の多重比較の結果

第3因子は、高位グループの平均が2.55、中位グループの平均が3.44、低位グループの平均が3.46であり、

分散分析の結果、グループ要因は1%水準で有意であった（ $F(2, 77) = 10.01, p < .01$ ）。多重比較の結果、高位グループとGSES中位グループ、低位グループの間で有意差が認められた（ $p < .05$ ）。GSES高位グループがGSES中位グループやGSES低位グループに比べて第2因子の得点が有意に低いという結果であった（図3）。

なお、因子2と第3因子について。性とGSESグループ（高位・中位・低位）の交互作用を分析するために、2要因の分散分析（一般線形モデル：一変量）を行った。その結果、第2因子においても第3因子においてもともに、性とGSESグループの交互作用に有意差は認められなかった（表21及び表22）。

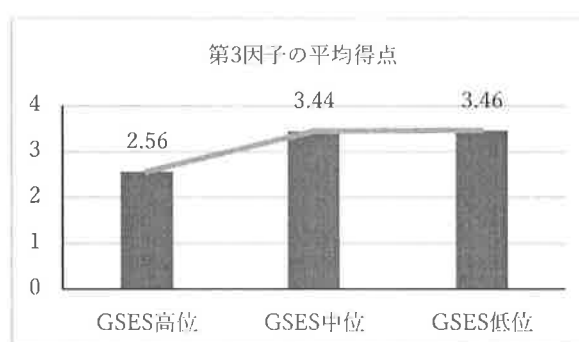


図3 第3因子の多重比較の結果

表21 第2因子についての交互作用の分析

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	8.203a	5	1.641	2.752	0.03
切片	179.92	1	179.92	301.85	0.00
性	1.257	1	1.257	2.109	0.15
GSES	4.117	2	2.058	3.453	0.04
性*GSES	0.755	2	0.378	0.633	0.53
誤差	44.109	74	0.596		
総和	373.31	80			
修正総和	52.312	79			

a R2 乗 = .157 (調整済み R2 乗 = .100)



表22 第3因子についての交互作用の分析

ソース	タイプ III 平方和	自山 度	平均 平方	F 値	有意 確率
修正モデル	16.552a	5	3.31	4.757	0.00
切片	481.8	1	481.8	692.26	0.00
gen	0.868	1	0.868	1.247	0.27
seg	9.163	2	4.581	6.583	0.00
gen * seg	1.274	2	0.637	0.915	0.41
誤差	51.503	74	0.696		
総和	865.64	80			
修正総 和	68.056	79			

a R2 乗 = .243 (調整済み R2 乗 = .192)

## 5. 考察

本研究においては、新型コロナウイルス感染症感染拡大とそれに伴う社会状況の変化による大学生の行動の変化と自己効力感の関係を検討した。

大学生の学生生活に関する行動と学修スキルについての志向性については、「主観的行動変化認知質問項目」24項目と、「学修スキル向上志向性質問項目」12項目を選定した。

「主観的行動変化認知質問項目」24項目については、因子分析（最尤法，バリマックス回転）により、「学習方略因子」，「抑うつ傾向因子」，「健康不安因子」の3因子と解釈された。これらは、遠隔授業などへの対応，コミュニケーションや交友関係の変化，健康の自己管理意識の変化などを反映する因子構成であると推定される。

「学修スキル向上志向性質問項目」12項目については、因子分析を進める中で、各項目間の相関が高く、2因子や3因子を抽出した場合においても、大多数の項目が第1因子への負荷を示すことから、1因子構造の可能性が高い。「学修スキル向上志向性質問項目」については、今後質問項目を精査していく必要があると考えられる。

一般性セルフ・エフェカシー尺度との関連では、「抑うつ傾向因子」においては、一般性セルフ・エフェカシー尺度の得点が高位グループが、中位グループと低位グループに比べて得点が低い結果であった。自己効力感が高い方が、一連の社会状況の変化に対する適応がよく、抑うつの傾向が低く抑えられるのではないかと推定さ

れる。また、「健康不安因子」においても、一般性セルフ・エフェカシー尺度の得点が高位上グループが、中位グループと低位グループに比べて得点が有意に低いという結果であった。このことについても、自己効力感が高い方が、一連の社会状況の変化に対する適応がよく、健康行動においても自己コントロールができる傾向にあるためではないかと推定される。

本研究の調査と同じ時期である2021年7月に、全国大学生生活協同組合連合会が、「コロナ禍の大学生生活アンケート」を行い、8月に結果を公表している。この調査結果によると、また、「学生生活は充実しているか」という問いに対しては、「充実している」と「まあ充実している」を合わせると55.3%であり、「充実していない」「あまり充実していない」を合わせた44.7%よりわずかに多い。この結果は、前回調査（2020秋）と比べると18.9ポイント低下しているものの、学生により、学生生活の変化の受け止めや充実感の感じ方に開きがあると言える。また、「オンライン講義について感じること」では、「通学の負担がないため、自由な時間が増える」（62.1%）が最も多く、ついで「集中力が対面講義に比べて続かない」（57.8%）、「いつでもどこからでも参加することができる」（50.0%）となっている。この項目についても、ポジティブな回答かとネガティブな回答が拮抗しており、やはり、学生により受け止めに差があることがわかる。

本研究における、自己効力感の強さの違いは、これらの学生の社会状況への変化への適応や新しい生活様式への移行に影響を及ぼす要因であると考えられる。

今後は、「学修スキル向上志向性」のような意欲や情意面の形成と自己効力感の関係の検討など研究が進むことが望まれる。

## 引用文献

- Albert Bandura 1977 Self-efficacy: Toward a Unifying Theory of Behavioral Change *Psychological Review*, 84(2), 191-215.
- Albert Bandura 1995 *Self-efficacy in Changing Societies* Cambridge University Press (アルバート・バンデューラ (本明寛・野口京子監修訳) 1997 激動社会における個人と集団の効力の発揮 激動社会の中の自己効力 金書書房)
- 堀毛裕子 1991 日本版Health Locus of Control尺度の作成 *健康心理学研究*, 4, 1-7.

川島範章 2021 健康統制感と健康行動並びに感染懸念の関係について 福山平成大学福祉健康科学研究, 16, 71-82.

厚生労働省 2020 「新しい生活様式」の実践例 <https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/000641743.pdf> (2021.9.8取得)

文部科学省 2020a 新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえた学校教育活動等の実施における「学びの保障」の方向性等について (通知) [https://www.mext.go.jp/content/20200515-mxt\\_kouhou01-000004520\\_5.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200515-mxt_kouhou01-000004520_5.pdf) (2021.9.8取得)

文部科学省 2020b 大学等における新型コロナウイルス感染症への対応ガイドライン [https://www.mext.go.jp/content/20200605-mxt\\_kouhou01-000004520\\_5.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200605-mxt_kouhou01-000004520_5.pdf) (2021.9.8取得)

文部科学省 2020c 大学等における後期等の授業の実施状況に関する調査 [https://www.mext.go.jp/content/20210212-mxt\\_kouhou02-000006590\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210212-mxt_kouhou02-000006590_1.pdf) (2021.9.8取得)

文部科学省 2021a 学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～「学校の新しい生活様式」～ (2021.4.28 Ver.6) [https://www.mext.go.jp/content/20210514-mxt\\_kouhou01-000007426\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210514-mxt_kouhou01-000007426_1.pdf) (2021.9.8取得)

文部科学省 2021b 新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査 (結果) [https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf) (2021.9.8取得)

坂野雄二・東條光彦 1986 一般性セルフ・エフェクシー尺度作成の試み 行動療法研究, 12 (1), 73-82.

全国大学生生活協同組合連合会 2021 届けよう! コロナ禍の大学生生活アンケート集計結果報告 [https://www.univcoop.or.jp/covid19/pdf/covid\\_enq\\_2108\\_02.pdf](https://www.univcoop.or.jp/covid19/pdf/covid_enq_2108_02.pdf)

#### Appendix 1 主観的行動変化認知質問項目

- q1 生活のリズムが崩れて疲れやすくなった  
q2 勉強に対する集中力や意欲が低下した  
q3 外出する意欲が低下した  
q4 友だちと遊びたい気持ちが低下した  
q5 趣味を楽しみたい気持ちが低下した  
q6 対面でおしゃべりすることが楽しく感じられ

なくなった

- q7 計画的に学習を進められなくなった  
q8 運動する意欲が低下した  
q9 運動能力や体力について自信が低下した  
q10 友だちと一緒に過ごすことが楽しく感じられなくなった  
q11 したいことや手に入れたいものが明確でなくなった  
q12 将来の職業選択について迷うようになった  
q13 本や雑誌などを読む意欲が向上した  
q14 オンラインで授業や会議に参加する技術が身に付いた  
q15 時間を自分の趣味や余暇に使うことが増えた  
q16 将来の職業などに備えた準備を始められた  
q17 健康に気を配り体力トレーニングなどをするようになった  
q18 積極的に友人と関わろうと思うようになった  
q19 料理や掃除など家事をする力がついた  
q20 物事を進めるときに、計画したり下調べすることが増えた  
q21 パソコンなどの情報機器の知識や操作する力が向上した  
q22 会えない人とは電話などで話そうとする積極性がでてきた  
q23 オンライン学習で自分のペースで学習できるようになった  
q24 家族や周りの人を大切にしたいと考えるようになった

質問文: 新型コロナウイルス感染症流行以前 (2019年以前) と比べたあなたの状況について尋ねます。次の1～12の項目について、「よく当てはまる」から「全く当てはまらない」の5段階から、あなた自身の現在 (2021年7月) の状況に当てはまる数字に○を付けてください。

#### Appendix 2 学修スキル向上志向性質問項目

- q25 勉強に集中する力を向上させたいと思うようになった  
q26 文章を書く力を向上させたいと思うようになった  
q27 コミュニケーション能力を向上させたいと思うようになった  
q28 情報機器の操作やキーボード入力速度を向上

- させたい
- q29 自分の意見をはっきり伝えられるようになりたいと思うようになった
- q30 オンラインで学習や仕事を進める力を身に付けたいと思うようになった
- q31 行動力や企画力を向上させたいと思うようになった
- q32 人の感情を敏感に感じられるようになりたいと思うようになった
- q33 主体性や積極性を向上させたいと思うようになった
- q34 将来の職業に必要なスキルを高めたいと思うようになった
- q35 うまく話せるようになりたいと思うようになった
- q36 表情を豊かに見せるなど感情が伝わるようにしたいと思うようになった

質問文：新型コロナウイルス感染症流行以前（2019年以前）と比べたあなたの状況について尋ねます。次の1～12の項目について、「よく当てはまる」から「全く当てはまらない」の5段階から、あなた自身の現在（2021年7月）の状況に当てはまる数字に○を付けてください。

### Appendix 3 一般性セルフ・エフェカシー尺度項目

- se1 何か仕事をするとき、自信を持ってやるほうである
- se2 過去におかした失敗やいやな経験を思い出して、暗い気持ちになることがよくある
- se3 友人よりすぐれた能力がある
- se4 仕事を終えた後、失敗したと感じることのほ  
うが多い
- se5 人と比べて心配性なほうである
- se6 何かを決める時、迷わずに決定するほうである
- se7 何かをする時、うまくいかないのではないかと不安になることが多い
- se8 引っ込み思案なほうだと思う
- se9 人より記憶力がよいほうである
- se10 結果の見通しがつかない仕事でも、積極的に取り組んで行くほうだと思う
- se11 どうやったらよいか決心がつかずに仕事にとりかかれなことがよくある

- se12 友人よりも特にすぐれた知識を持っている分野がある
- se13 どんなことでも積極的にこなすほうである
- se14 小さな失敗でも人よりずっと気にするほうである
- se15 積極的に活動するのは、苦手なほうである
- se16 世の中に貢献できる力があると思う

質問文：次の1～16の項目について、その行動をやり遂げる自信があるかどうかについて尋ねます。今のあなたに当てはまる場合には、「Yes」、当てはまらない場合には、「No」を○で囲んでください。「Yes」、「No」のどちらにも当てはまりにくい場合でも、より自分に近いと思われる方に必ず○を付けてください。

# Research on Adaptation of College Students to NEW NORMAL -Impact of the Coronavirus Pandemic-

Noriaki KAWASHIMA

Department of Childhood Education,  
Faculty of Welfare and Health Science,  
Fukuyama Heisei University

## Abstract

The spread of the new coronavirus infection (COVID-19) has changed society significantly. Distance learning was introduced at the university. There are individual differences in adaptation to change. In this study, the effect on university students was examined. Behavioral change questions, study skill questions, and generality self-efficacy scales were used in the survey.

As a result of factor analysis, three factors, a study strategy factor, a depressive tendency factor, and a health anxiety factor, were found for behavioral change questions. Adaptation to distance learning, changes in communication and friendships, and changes in health management were associated with three factors. Study skill questions were presumed to have a one-factor structure. The relation to the general self-efficacy scale was examined. It was found that the group with a high score on the general self-efficacy scale had a low score on the depressive tendency factor. It was found that the group with a high score on the general self-efficacy scale had a low score on the health anxiety factor.

This study found that students with high self-efficacy had good adaptations to NEW NORMAL.

KEY WORDS : Self-Efficacy, Behavioral Changes, Coronavirus Infection